九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

謡曲譜本に反映したる和語アクセント : 体系と若干の音韻史上の問題をめぐって

添田, 建治郎

https://doi.org/10.15017/2332747

出版情報：文學研究. 71, pp.1-22, 1974-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

謡曲譜本に反映したる和語アクセント

——体系と若干の音韻史上の問題をめぐって——

添田建治郎

一、はじめに

謡曲譜本所載の、種々の旋律を表わす曲節の中にあって、カヽル、詞、クドキの三曲節については、前稿「アクセント資料としての謡曲譜本の意義」(『語文研究』第三十四号)において、三者それぞれの特徴を帯びた旋律の上に近世初期の京阪アの現実の姿をかなり正確に反映している(名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞のアについていう。)[1]こと、従って、補忘記、平曲譜本[2]と同様に近世初期の京阪アを語る資料として、十分に活用に供されてしかるべきことを、明きらかにするよう努めた。しかしながら、謡曲譜本中のこれらの三曲節に、従来、ア資料としての取り扱かいを受けてきたところの、例えば、平安末〜鎌倉初期アを語る場合でいえば、古写本・日本書紀、図書寮本や観智院本の類聚名義抄[3]、鎌倉期は、大慈院本・四座講式、それに、古今訓点抄などの古今集声点本、そして、近世初期にあっては、真言宗の論議書補忘記、平曲譜本等々、これらの諸々のア資料との比較において、同等の資料的意義、とりわけ、近世初期ア資料としての意義を真に見出し得る為には、三曲節の上に

あらわれる和語アの体系――型の区別や各型式に所属する語彙の一覧――についての、なお詳細な報告が望まれる。本稿においては、謡曲譜本の上に行なわれる型の区別の報告と、各型式に所属する語彙の中の若干の語の上にあらわれる特定の出入りに関しての解釈などを述べることによって、前稿での結論を確認することとしたい。その際、謡曲譜本に隣接する近世初期アの資料と目される補忘記、平曲譜本のもつ体系との綿密なる比較や、謡曲古本から観世流昭和大成版謡曲百番にまで至る譜本中の胡麻譜、発音注記（節付き）などの変化、旋律の種類と特徴に関する記述については、一、二に触れ、その大部分を次の機会に譲りたい。

この報告における調査の対象は、日本古典全集刊行會から複製されて世に出ている、謂ゆる光悦本『謡曲百番』第一～第四所載の各曲であり、前稿の結論に従いカヽル、詞、クドキの前記三曲節の中から、豊富な用例の期待できるカヽルの旋律を専らに扱かうこととし、それによって得られる結論を詞、クドキの場合にも及ぼすという方法に従うが、記述の便を考えてのことである。尚、ここに底本として取り上げる光悦本『謡曲百番』の成立考証は、正宗敦夫氏の手になると思しき日本古典全集『謡曲百番』解題、それに『謡曲・狂言』（国語国文学研究史大成8）新しくは表章氏の「東洋文庫蔵光悦謡本解題」に詳しく、〃徳川初期の慶長年間に光悦が自家の能筆を以て〃成したものとする説は動かない。譜本所載の胡麻譜に反映しているアについても、金春禅鳳の毛端私珍抄をはじめとする能楽書の記述からも明きらかなごとく、吟唱伝承にあたって当時の現実のアを正しく唱え、伝えるよう意を払い、その点で現行謡曲にみられる強吟弱吟の区別からする様式化した、アを無視する吟唱傾向とは異なった性格を備えた〃謡物〃であったろうことは、既に触れたごとくである。[4] ところで、調査を及ぼすこのカヽルの曲節――日葡辞書にヘウシニカカツテマウとある――は、四座講式や平曲譜本の場合同様、その持てる旋律

の上に当時の現実のアを反映するものではあっても、決して本来的にアの記述を目指したものではないが、話線を伴なったアを観察し得る点では有利な条件をもっている。しかも、大部分の語句が高・低二種の胡麻譜に、そして、同一語や、同一の型に属すると目される多くの語が、同じような「胡麻譜の組み合わせ」によって表記され、それらが、補忘記、平曲譜本などによって明きらかにされている近世初期の京阪アに概ね一致する形態をとることなどによれば、補忘記、平曲譜本に対して与えられたと同様の資料的意義を考えておいて間違いはないと思われる。

また、この謡曲譜本所載の胡麻譜や発音注記の類が、現実の如何なるアを反映したものであるかについては、早く金田一春彦氏に「邦樂の旋律と歌詞のアクセント」の論がある。[5] 直胡麻（一）、下胡麻（＼）に、それぞれ高音、低音の反映していることについては最早いうまでもないが、下胡麻の中には、（|）の形をとるものが認められる。漢字部分の施譜にあたって集中してみられるが、かって、四座講式の文明本・永正本などに行なわれた、特低音を示す譜とは異なるのではなかろうか、例えば、

心に（関寺小町、第四、64ペ上段14行）

のごとき、漢字一字に和訓三拍相当の施譜の必要ある場合や、曲節や吟唱者の交代の劈頭に置かれた漢字に対する施譜などに際して、狭い行間に納めるという物理的な事情からとられたものと考えたい。一方、「こころ」の例は数多い。また、廻す節（|）なるものは、

廻す節は章二つの心なり前は直後は下げなり

との音曲玉淵集（五）の記述によれば、旋律については高→低の変化をもつものなることは明きらかなれど、当

面の廻す節に反映するア如何ということでは、

雲に（安宅、第四、196ペ下段13行）

雲を（三輪、第三、133ペ下段11行）

同一語「雲」の同一部分（第二拍）に下胡麻が対応し、このような組み合わせの例も決して少くない。四座講式における複合胡麻譜の場合と同様に低音を考えるべきであろうか。振り節（ミ）についても、音曲玉淵集（五）には、

これら（筆者注、（ミ）を指す）は上音にて謡ひかくる故張る

との記述がみえる上に、いずれも直胡麻の期待される部分に施されており、高音を反映するものであろう。その他、「ハル、クル、当」などの発音注記の類も、前記のごとき手続きや、平曲譜本における用法を参考に照らしてみれば、前二者には高音が、（当）には低音が反映しているようであるが、（当）については、「引き節、ノミ節」などと同じく、アとは無縁な場合もあり区別されなければならない。唯、カ〻ルの部分に限っていえば節付きの類は余り例を多くみない。

二、謡曲譜本に反映したる和語ア

さて、謡曲譜本所載の和語アの体系を、名詞ア、動詞・形容詞アの順に記述し、近世初期京阪ア資料としての意義を明きらかならしめたい。記述にあたっては、この立場から、近世初期京阪ア資料としての特徴ある現象について主として触れ、他は多く末尾に掲げる資料1〜7に委ねて語らせることとしたい。

(1) 名詞ア

二拍名詞のアは、資料1に示すところによれば、山類所属の「波、池、月、夢」などの語において、助詞「ハ、ガ、ニ、ヲ」を下接させる場合に、[6]「語頭における低音連続の傾向が失なわれて高起化する」という南北朝期までにあらわれた、謂ゆる一般的なア変化[7]に従って、いずれも●○▼型に実現し、従来まで川類との間にみられた型の区別が消滅し合併を遂げている。松ハ類には、助詞の高く下接する、従来までのあるべき○●▼型が専らである。現代京阪アにおいては○●▼型より更に新しく○○▼型がみえるが、平曲譜本での二様の状態—○●▼型三二例、○●▽型二四例[8]—に比較すれば、ア資料としての精度に信をおくべき特徴として留意すべきであろう。しかしながら一方で、平曲譜本、補忘記におけると同じく、雨ハ類、雨ノ類には、○●▼のようにそれぞれの助詞が高く下接する傾向があり、謡曲譜本の場合にはこの傾向が幾分強くあらわれている。現代京阪アにあって、助詞が依然として低下し、松類との間に合併をみていない事実や、〃分化から統合へ〃という説明の例外となるべき特定の音韻論的な事情も見出し得ない点を考慮にいれるとすれば、両類の区別が曖昧であったという統合した状態からの改めての分化は考えにくく、この場合に特に発揮されるような、下降拍に対する観察が、譜本に備わる資料的性格、即ち、音楽性の働きによって十分でなかったこと、謂ゆる「音声学的なア」の観察の余地のあったことをその原因として考えなければなるまい。

助詞「ノ」を下接させる場合についてみるに、山ノ類では高平板型があらわれ、●●▽型と、より新しい型と目される●●▼型とに用例を折半し、共に庭ノ類との間の型の区別が失なわれている。一方に、川の類に●●▽、●●▼型の少ない事実は、山、川両類の合併に先んじて高平板化の行なわれたことを示すか。また、松ノ類につ

いても、四座講式などの鎌倉期資料に一般であった○●▽型と、現代京阪アに行なわれる新しい○●▼型との両型式が譜本にはあらわれている、など、近世初期の京阪アの特徴的な現象を多く映している。わけても松ノ類の場合、平曲譜本での伝統的な○●▽型専一の傾向に比べると、補忘記における

○●▼型（奥の二例、何（なん）の一例）、○●▽型（今の二例、上（かみ）の一例）

という両型式の拮抗する傾向の方に近しい。謡曲譜本では、安定型である○●▽型を措いて二語連続とも受け取られかねないより新しい○●▼型をとったが故に、奥村三雄氏のいわれる助詞相互間の類推的体系性[9]が十分発揮されずに平曲譜本の場合とは異なり、先の松ハ類は○●▼型を専らにしたものとして肯かれる。現代京阪ア松ハ類にみられる、高音部分の後退した○○▼型については、平曲譜本、補忘記同様見出すことができない。この他の庭類、川類のア型式の種別については従前の通りの体系に従っている。

さて、資料2に示す三拍名詞では、頭ハ類、命ハ類の両類が、二拍名詞山ハ類におけると同様、語頭での低音連続傾向を失なって高起化を起こしていることがまず目につく。つまり、頭ハ類はもとより、比較的遅く実現したとみなされる命ハ類の●○○▼型化も、謡曲譜本では、●○●▼型として映され、頭類は小豆類との間に、命類は二十才類との間に、それぞれ型の区別を失ない、ここにも近世初期京阪アの典型がみえる。命類の○○●型や頭類での○○○型などの伝統的な施譜例を見出すことはできない。頭類と命類との合併はまだみえない。カヽルを対象とする限りでは、平曲譜本の場合と同様に高起化は全く完了しているといえる。助詞「ノ」を下接させる場合についても、頭ノ類に高平板型があらわれ、●●●▽型と、より新しい●●●▼型とを呈して、形類との間の区別が失なわれ合併している。これは二拍名詞山ノ類と庭ノ類との合併に原理を同じくする。命ノ類も高

起化を遂げている。

次いで、一拍名詞は資料3に掲げる。名ハ類、名ノ類に、本来あるべき●▽型の外に、助詞の高く下接する●▼型がみえる。現代京阪アでも●▽型である故、ここにも、雨ハ、雨ノ類が助詞の高く観察された○●▼型をとったと同じく、「音声学的なア」の観察がなされたものであろう。手ハ類の場合も、近世初期における手類アが『和字正濫通妨抄』の教えるところ上昇調であるので、音韻論的には◒▼型に行なわれ、その観察を施譜するに際して、○▼、●▼の両様をとることになったものと考えられる。手ノ類また然りである。

(2) 動詞・形容詞ア

動詞アの記述に際しては、奥村氏のまとめられた平曲譜本の体系との比較の必要や、活用形ごとの記述には形態音韻論的考察への意義を認めることもあって、資料4～6のように体系だてた。それによれば、三拍二段活用動詞・捨類における終止形Ⅰと連体形は、●●、●●●といずれも高平板型をとり、拍数を異にするものの、二段活用動詞での「終止、連体同形化」という文法機能上の変化に応ずる形態面での変化であろうか。このことは、二拍四段活用動詞・置類において、終止形としては●●型が専一に行なわれ、●●型をとる連体形との間に区別が失なわれるという符節の一致からも肯かれる。この点平曲譜本は、置類終止形Ⅰに●●、●○の両型式があって伝統的な傾向をも残していること、比較として興味深い。三拍四段活用動詞・渡類の場合も、終止形Ⅰと連体形とが同形となっているが、なかには、三拍二段活用動詞・建類のように、終止形Ⅰとして低起式の○●型、連体形に高起式の●○●型をとって、例外とも受け取られかねないものがある。補忘記、平曲譜本にも同様の傾向を見出すが、この点については、南北朝期までにあらわれた、語頭における低音連続傾向の消滅の働きによっ

て、それまで○○●型であったものが品詞の別を問わず並べて●○○型に変じ、連体形が○○●型であったこの建類の場合にも例外とはならず、●○○型に実現した故、との説明が与えられよう。三拍四段活用動詞・動類[10]の各活用形アが従来までの○○●型ではなく、等しなみに●○○型をとっているのはその典型である。

取類の連用形Iは、平曲譜本には○●、●○の両型があらわれる。[11] これに対し謡曲譜本では、四一例が○●型、わずかに四例が●●型である。これによれば、平曲譜本の場合のように置類との混同、ないしは両型を認める立場には組みし難く、むしろ、平曲譜本のうち、東京教育大学蔵片カナ八行本[12]の、○●型が多数を占める傾向の方に近似すること、興味深い。建類の連用形Iについても同様のことがいえる。即ち、

見え給ふは（田村、第四19ペ下段2行）

のごとく、五五例が専らに○●型をとり、●●型の例はみえずに、古いとされる『東京教育大本』や、平曲譜本の白声（口説、拾）以外の曲節における傾向の方にこそ近いわけである。

音便形のうち、促音便形についていえば、取類では、

となって（頼政、第一、86ペ表2行）

のごとくに、八例いずれもが○●▼型となって、非音便形の場合と同形をとるが、二拍名詞松ハ類が○●▼型をとって未だ現代京阪アの○○▼型はなく、三拍名詞兎類、三拍四段活用動詞・歩類にも○○●型はない[13]ことを考え合わせるべきか。置類には促音便形の例をみない。動類の場合も、四例とも非音便形に同じく●○●型に施譜されている。一方、渡類の二例、捨類の一例の場合はやや、事情が異なり、それぞれ、

むかって（殺生石、第四、39ペ下段10行）

くたって（常陸帯、第四、141ペ上段11行）
わつて（兼平、第四、168ペ下段5行）

というように、●●●、●●型の高平板型をとり、平曲譜本での●●○、●○型の傾向と異なりをみせ、「音声学的なア」、場面的変容の姿を映しているのであろう。「上」のア観察が●○と●●の間で、「所」が●●○と●●の間で、従来のア資料でも、そして謡曲譜本でも揺れているように、上昇よりも下降の方が観察に若干の困難を伴なっていたこと、ここにも、名ハ・名ノ類、雨ハ・雨ノ類の観察に際して●▼、○●▼が比較的多かったと同根の理由を見出す。

その他、「形態と意味内容の相関」について触れておきたい。置類の場合、その活用形アのほとんどが高平板型を呈するが、中に連用形Ⅰと已然形とのみは●○型をあらわし、渡類、捨類でも全く同様に高平板型をとることはない。取類、動類、建類においても、これら両活用形は、低起式を示すことによってか、もしくは高平板型をとらないことで、他の諸活用形アとの間に形態上の差をみせる。このことは、連用形Ⅰと已然形の両活用形の場合、それらに下接する助詞「て」「ば、ども」との融合の度合が、他の諸活用形の場合に比べて最も弱く、下接語との間に二語意識の働いていたことを示すものに他ならない。これに対して、従来低起式に終始していた取類、動類、建類の中で終止形Ⅱは、この譜本よりも早くに高起化し、譜本では更に進んで高平板化を遂げている。この場合は、下接している助動詞「まじ、べし」との間の融合度という点において最も強く、文法機能上の特徴、文節全体の一語意識を形態の上に反映したものと解すべく、この両者の中間に、高平板化には至らないものの高起化を遂げて●○、●●○型をみせる連用形Ⅱ、未然形Ⅲが位置するものと考える。併せて、動類のごと

きは高平板型化して融合度の強さを示すに至らない。

このように動詞活用形アの体系は、平曲譜本、補忘記の体系に似るが、なかには現代京阪アにこそより近い若干の特徴を帯び、伝統的な、『東京教育大本』に近しい一、二の現象も指摘せられるなど、資料的均質性という点では決して一様とは言い難い。

次いで、形容詞アは資料7に示す。この場合にも、平曲譜本のもつ体系との間の類似をいわねばならない。赤類についていえば、ほぼ平曲譜本の体系に等しく、連体形に●○●型がみえて現代京阪アの一端をみせる。全体に高平板型が目につく。白類の場合も、連用形を除けばいずれも四座講式からの高起化を遂げた形態を考えれば、謡曲譜本の型式に一致してくる。その連用形にしても、連用修飾の場合には○●○型をとって伝統的な形態に従っているわけであるから、平曲譜本の場合同様謡曲譜本のもつ特徴として面白い。なお、この時期、そして謡曲譜本に赤類と白類との区別の存することはもとより言うまでもない。

以上、謡曲譜本カヽル所載のアについて概略述べてきたが、動詞ア形容詞アの若干に現代京阪的要素や伝統性が見出されるなど、一様というわけにはいかないものの、概ねにおいては、平曲譜本、補忘記と同様、近世初期の京阪アの現実の姿を反映したものであること、従って、謡曲譜本カヽル、詞、クドキにも近世京阪ア資料としての意義を見出しうることを改めて確かめえたものと考える。

三、謡曲譜本所載の和語アをめぐる若干の音韻史上の問題

(1) 謡曲譜本の●○●型

古今訓点抄、大慈院本・四座講式などにおいて、二拍名詞川類に下接する助詞「ハ、ガ、ニ、ヲ」の卓立する傾向は既に失なわれてしまっているが、それらより更に下り、近世初期の京阪アを映していると目される謡曲譜本にあって、この川ハ類のア型式に●○▼型が多くあらわれ、あたかも助詞の卓立傾向が、未だ失なわれていないかのごとき観を呈する例がある。

石は（葛城、第四、6ペ上段14行）

このように、低音部を隔て、二つの高いアの丘が前後にあらわれる例は、二拍名詞では他にも、山ハ類、三拍名詞でいえば、命ハ、命ノ類、頭ハ類、小豆ハ類、二十才ハ類、兜ハ類、動詞には、動類の未然形I、連用形I、終止形、連体形、已然形、建類の連体形、形容詞白類の終止形、連体形などを挙げうるが、このような●○▼、●○●▼、●●○▼、○●○▼、●○●などの、謂ゆる「●○●」型[14]をとるそれぞれには共通した傾向が認められる。即ち、川ハ類、小豆ハ類、二十才ハ類、兜ハ類を措けば、そのいずれもが、中世前期アでは低起式を専らとし、南北朝期までに語頭での低音連続の傾向が失なわれて高起化を遂げた型式であるという点である。まず、命類、動詞、形容詞の各活用形アについていえば、アに統合的機能を考える立場よりすれば、これら一語の中に低音部を隔てての二つの高いアの丘が前後にあらわれる形式は、ラング状態の観察では到底認め難く、その他の山ハ類、頭ハ類の場合についても、助詞の卓立傾向が最早失なわれているべき謡曲譜本中での多数の「●○●」型であるところから、問題とされなければならない。そこで、山ハ類における●○▼、命類の●○●を取り上げてみると、次のような解釈が行なわれている。〔○○▼→●○▽〕、〔○○●→●○○〕という一般的なア変化が南北朝期までにそれぞれ起こり、その変化の過渡的現象として、つまりは、第三拍目の高音部が後退し第一拍目に

あらわれてくるという、「急激なア変化」に対しての緩衝的な意味合いを「●○●」型に見出す立場。新義真言宗の声明資料、仏遺教経において「●○●」型に施譜された曲調を金田一春彦氏が、

これは○○●型が●○○型に移る時の過程を表わしているもののようで興味をひく（中略）○○▼型が●○▽型に変化する途中●○▼型であった時代があったことを推測させておもしろい。[15]

とされるのがそれである。桜井茂治氏が補忘記下巻相当部分の「●○●」型をとり上げて音声学的なアの相を映したものとされるのは、[16] 音韻論的な型と認められる金田一氏との間に微妙なニュアンスの差をもつ。今一つは、同じく仏遺教経を取り上げて桜井氏が、二つの原理、即ち、主として「直前の高い曲節に引かれておこった曲節変化」で、直前が低い曲節の時にも稀にあらわれる「●○●」型については「南北朝期の型の変化に引かれた類推変化」によって説かれる立場であり、[17] 後者の説明は、類推変化は別としても、型の変化の過渡的現象としての「●○●」型の存在を音韻論的に認める点では金田一氏の立場に同じい。奥村氏にも、平曲譜本、謡曲譜本、仏遺教経などの「●○●」型を取り上げて、

（筆者注●○●）が安定したラング型式として用いられた時期はあったとしてもごく短かかった。

とされて、〔○○●→●○○〕の過渡的現象として受け取ることに消極的で、むしろそれよりは、パロール的（音声学的）なア観察に由来する音楽的な旋律特徴に注目せられている。[18]「●○●」型なるものは、資料8にみるように平曲譜本の曲節の中でも折声に比較的用例が集中（「●○○」型も少ないというわけではない）し、白声、口説などには例をみない。補忘記もまた同様に、下巻相当部分に集中し上巻では●○▽、●○○型になる。このように「●○●」型なるものは、平曲譜本の折声と補忘記下巻相当部分、謡曲譜本とに顕著な現象で、とり

わけ謡曲譜本に著しい。ちなみに、語頭における低音連続の傾向が失なわれて高起化するに至った一連の語彙の中で、「●○●」型をとらぬものを謡曲譜本の中に求めるとすれば、

心に「ハルニ」は（阿漕、第二、113ペ上段12行）

のわずか一例があるばかりで、これとても、第二、三拍間に「ハル」の注記が合わせて施されてあって確例とはみなし難い。同時に、仏遺教経の中には、「●○●」型をとらずに依然として伝統的な○○▼、○○●▼型に実現する例が少なからずみえるのに対して、謡曲譜本では「●○●」型専一といってよい。更に、〔○○●→●○○〕という一般的なア変化とは何ら関係なく、本来が高起式の●○▽たるべき川ハ類や、●○○▽、●●○▽、○●○▽型をとるべき二十才ハ類、小豆ハ類、兜ハ類においても、それぞれ、四十、二、四、一例と、いずれも「●○●」型があらわれ、

其ために「（通盛、第一、113ペ表2行）

申さんために「（江口、第三、199ペ上段14行）

の二例を例外として数えるばかりである。このように謡曲譜本では専ら「●○●」型であるということを考えれば、まず仏遺教経における「●○●」型を曲節変化にもとめて説かれる立場は、謡曲譜本に限っていえば従い難い。更に、平曲譜本の折声、補忘記下巻相当部分や謡曲譜本に顕著に「●○●」型があらわれるということからは、三者が、共に型の変化〔○○●→●○○〕の過渡期の●○●型を音韻論的に映して、比較的古い形態をみせている、とも、また、他の曲節には期待できない音楽的な旋律特徴を特に映している、とも、まだそのいずれにも解しうる余地があるが、謡曲譜本が他の二者に比べてより徹底して「●○●」型をとるという事実に着目す

れば、謡曲譜本に「●○●」型が専一にあらわれることの理由としては、たとえ先に挙げた二つの説明のうちのいずれをとるにせよ、そのより著しい場合を考えねばなるまい。ところが、謡曲譜本はすべての曲節に「●○●」型があらわれるのに対し他の二者は折声、下巻相当部分に限られること、低音連続傾向の消滅云々とは関係なく本来的に高起式たるべき川ハ類、二十才ハ類、小豆ハ類が、やはり●○▼、●○●▼、●●○▼の「●○●」型をとるという事実のあることを考えれば、なお型の変化、従って「合併による類推」の働きの依然としてありうることは認めつつも、平曲譜本折声、謡曲譜本全体が帯びている音楽的な旋律特徴による解釈に傾く。しかも、

後に（盛久、第三、50ぺ下段9行）[19]

なる兜類の一例は、唯一例ながらも、合併による類推の作用を考える立場に消極性をもちこむ。この「●○●」型が、〔○○●→●○○〕なる型の変化の過渡的現象を映したものとする考え方は、謡曲譜本の場合を律しえず、むしろ、「●○、●●○とくれば、次の一拍は必ずや高音に唱えるべきもの」という音楽的な旋律特徴の存在を考えたい。従って、下降部分まではその**ア**を京阪**ア**の現実のものとして受け取ってよいことになる。

(2) 語の**ア**類別

謡曲譜本の施譜を詳細に吟味してみると、個々の語の**ア**型式をはかる上で、なお問題となるべき若干の現象を指摘することができる。三拍名詞「所」は、現代京阪**ア**でこそ形類に属しているが、四座講式、平曲譜本では●●●、●●○型の二様に行なわれ、助詞を介さぬ場合にはその調価が●●●でありえたのではないかとの見方がある。[20] この点を謡曲譜本によってみてみるに、

何れの所にか（三井寺、第四、124ぺ下段12行）

聞る所に」（常陸帯、第四、141ぺ上段1行）

のごとく、●●○型に施譜された二例が●●●型をとる三例と拮抗している。

何ノ――（許）トコロ集（図・名義抄）

の一例、観・名義抄の六例はいずれも●●●型で揺れがないものの、仏遺教経においては、形類所属の語の中でこの「所」ばかりが所属が一様でない。このことより推して謡曲譜本における「所」の調価も、施譜にあたって●●○にも●●●にも観察される●●◐型を考えたい。また、二拍名詞「上」の場合にも、

このうへには（大會、第三、173ぺ下段6行）

祈るうへは（道成寺、第四、34ぺ下段13行）

のように、二例がいずれも●○型に行なわれ、補忘記、現代京阪アでの庭類所属とは異なり、図・名義抄（二例とも●○）、観・名義抄（●○三例、●●二例）、四座講式（●○多し）や、平曲譜本での●○型が多数を占める傾向に近い。この「上」についても、謡曲譜本以外には●●型もあることから、●◐型の一時期のあったことと、謡曲譜本での●○型の譜は観察に際しての揺れとして理解したい。

御身ひとりを（清経、第一、126ぺ裏7行）

の一例についても問題が残る。三拍名詞「一人」は観・名義抄によれば、

隻ヒトリ（僧中一三六）

と○●○型を示し、金田一氏の『國語アクセントの話』（春陽堂版）所載「國語アクセントの史的研究」121ぺでも×印を施されて兜類に所属している。その注記によれば、

×及び△は東京語、大阪語で同類の他の語とは異るアクセントで発音されるが、他地方の方言を考慮に入れるとその類に属させたいと考えられる語

とある。この間の事情は、「一人」が「一つ」共々現代京阪アで○○●型に行なわれて兎類の中から個別に兎類に合併し、東京アの場合とは所属を異にしていること、各地方言アにおける型の区別と所属語彙に関する報告、金田一氏の「補忘記の研究續貂」(『日本語のアクセント』)生田早苗氏の「近畿アクセント圏邊境地區の諸アクセントについて」(『國語アクセント論叢』[21])、とりわけ、豊富な調査語彙を駆使しての寺田泰政氏の『遠州方言のアクセント』(美哉堂書店)に例をとれば、兎類の中からこの「一人」だけが、浜名郡新居町、周智郡森町、中川根町上長尾(いずれも静岡地方)などの地で、それぞれ個別に頭類、命類、形類に合併していて所属に揺れのあること、などの事実によって肯づける。このような傾向は、四座講式における「一人」への施譜が○●○、●●○の二様に揺れて一定していないこととも無縁ではあるまい。謡曲譜本での○●●の場合、兎類所属とは言い条、揺れをみることの多かった「一人」が、この時までに個別に兎類に合併、やがて〔○●●→○○●〕という高音部の後退していく普遍的、一般的なア変化を受けて、兎類の他の語と共に今日の京阪アにみるような○○●型をとるに至ったものと考えれば、現代京阪アにおける「一人」のア型式をも含めた合理的な説明が与えられるのではあるまいか。その他では、

かうべに(鉄輪、第二、124ペ上段12行)

と○●●型を示す「首」には、観・名義抄、四座講式におけるような○●●、○○●両型間の揺れがみえず、同様に「後」も、先に引用のごとく○●○型であり、揺れをみせている四座講式の傾向とは異なることなど注目さ

れるが、用例数の絶対値の乏しさからいっても論証に不十分をきたす、現代京阪、各地方言アでの類別とを参照しつつなお検討の余地が残る。

四、おわりに

当面の、謡曲譜本のもつ近世初期京阪ア資料としての意義を明きらかならしめんとする本稿の目的がいささかでも実を結んだものなるか、大方の御批正をお願いしたい。「はじめに」に掲げ、本稿において留保すべきとした諸課題に加えて平曲・謡曲譜本相互の曲節の比較に進まねばと考えるものであるが、いずれも機会を改めて報告に及びたいと思う。

註（1）アクセントをアと略称し大字をもって示す。
（2）特に断わらない限り、京都大学国語国文学研究室蔵本『平曲正節』を指して用いる。
（3）以下、図・名義抄、観・名義抄と略称する。
（4）筆者の「前掲論文」52ぺ。
（5）『田邊先生還暦記念東亞音楽論叢』245～286ぺ所収。
（6）山ハ類と略称し、助詞「ノ」を下接させる場合には山ノ類としてこれに準ずる。
（7）金田一氏「國語アクセントの時代的変遷」、大野晋氏「仮名遣の起源について」（それぞれ『國語と國文学』昭和35年10月、25年12月号）参照。
（8）「平曲譜本に反映したアクセント―京大本平曲正節を中心として―」（『國語と國文学』昭和45年10月特輯号）の奥村三雄氏の論文所収の資料より引く、以下同様。
（9）奥村氏、「前掲論文」151ぺ下段。

(10) 以下、捨類、置類などのア型式の類別によって区別し活用の種類には触れない。
(11) 奥村氏、「前掲論文」149ぺ。
(12) 『東京教育大本』と略称する。
(13) 歩類の表示は例数が乏しいため省略。
(14) 傍線部分のように。低音部を隔てて前後に二つの高いアの丘のあるものを総称して呼ぶ。
(15) 『四座講式の研究』340ぺ注2。
(16) 「論議に反映した室町初期のアクセント」(『國語國文』昭和38年5月号)
(17) 「『仏遺教経』の旋律に反映した国語のアクセント」(『國語學』27輯) 67ぺ。
(18) 奥村氏、「前掲論文」154ぺ下段〜155ぺ上段。「アクセント史料として見た平曲譜本」(『文學研究』第69輯) 18ぺ。講座国語史2『音韻史・文字史』—古代の音韻—157ぺ。
(19) をんなの(芭蕉、第三、145ぺ下段10行)もあるが、現代京阪アで兎類に所属して、ここに○●○型の例としてあげるのをためらわせる。
(20) 『四座講式の研究』346ぺ。
(21) その他、平山輝男氏に「全国音調比較表」(『日本語音調の研究』)、「全国アクセント比較表」(『全国アクセント辞典』)がある。

資料1　二拍名詞

分類＼下接する助詞	庭類	川類	山類	松類	雨類
ハ・ガ・ニ・ヲ	●●▼ 50	●○▽ 2 ●○▼ 40 ●●▽▼ 4 6	●○▼ 36 ●●▽▼ 8 7	○●▼ 46	○●▽ 6 (○●▼ 5)
ノ	●●▼ 43	●○▽ 1 ●○▼ 16 ●●▽▼ 5 3	●●▼ 34 ●●▽ 32	○●▼ 11 ○●▽ 11	○●▽ 24 (○●▼ 6)

資料2　三拍名詞

分類＼下接する助詞	形類	小豆類	頭類	二十才類	命類	兎類	兜類
ハ・ガ・ニ・ヲ	●●●▼ 32	●●○▼ 4 ●●●▽▼ 1 1	●○▼ 33 ●●●▽▼ 1 4	●○●▼ 2	●○●▼ 25	○●●▼ 5	○●○▼ 1
ノ	●●●▼ 19	(●●○▼) (●●●▼ 1)	●●●▼ 16 ●●●▽ 5	(●○●▼)	●○●▼ 10	○●●▼ 2	○●●▽ 7

資料3　一拍名詞

分類＼下接する助詞	ハ・ガ・ニ・ヲ	ノ
戸類	●▼31	●▼9
名類	●▽15 （●▼4）	●▽2 （●▼3）
手類	○▼4 （●▼4）	○▼2 （●▼4）

註
●は高音、○は低音、▼、▽は助詞の高音、低音をそれぞれ表わす。数値は用例数を示し、×印は例の皆無なることを示した。（　）で囲み、数値を示さぬものは、近世初期の他のア資料との比較によって推定される型式である。但し動詞、形容詞については数値を略す。従って、三拍形容詞・赤類の連体形●○●は実例を有する。

資料4　二拍四段活用動詞

分類＼主な用法＼活用形		終止形Ⅰ	終止形Ⅱ	連用形Ⅰ	連用形Ⅱ	已然形	未然形Ⅰ	未然形Ⅱ	未然形Ⅲ	連体形
置類	Ⅱ以外	● ●	● ●	● ○	● ●	● ○	● ●	● ●	● ●	● ●
取類	Ⅱ以外	○ ●	● ●	○ ●	● ○	○ ●	○ ●	● ●	● ○	○ ●
置類	マジ・ベシ	●	●			●	●	●	●	●
取類	マジ・ベシ	●	●			○	●	●	○	●
置類	シ	●	●			●	●	●	●	●
取類	シ	●	●			○	●	●	●	●
置類	バ・ドモ	●	●			●	●	●	●	●
取類	バ・ドモ	○	○			○	●	●	●	●
置類	バ・ズ・デ	●	●			●	●	●	●	●
取類	バ・ズ・デ	○	●			○	●	●	●	●
置類	Ⅰ・Ⅲ以外	●	●			●	●	●	●	●
取類	Ⅰ・Ⅲ以外	●	●			●	●	●	●	●
置類	レサス・セラル	●	●			●	●	●	●	●
取類	レサス・セラル	●	●			●	●	●	●	●
置類	連体修飾・係結び	●	●			●	●	●	●	●
取類	連体修飾・係結び	○	●			○	●	●	●	●

資料5　三拍四段活用動詞

活用形＼主な用法＼分類	Ⅱ以外	マジ・ベシ	Ⅱ以外	シ	バ・ドモ	バ・ズ	Ⅰ・Ⅲ以外	レサセラル	連体修飾係結び
終止形Ⅰ	●○●	●●●	●●○	●●○	●○●	●○●	●●○	●●●	●○●
終止形Ⅱ	●●●	●●●	●●○	●●●	●●○	●●●	●●●	●●●	●●●
連用形Ⅰ	●○●	●●○	●●○	●●○	●○●	●○●	●●○	●●●	●○●
連用形Ⅱ	●●○	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●
已然形	●○●	●●○	●●○	●●●	●●○	●●●	●●●	●●●	●●●
未然形Ⅰ	●○●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●
未然形Ⅱ	●●○	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●
未然形Ⅲ	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●
連体形	●○●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●

資料6　三拍二段活用動詞

活用形＼主な用法＼分類	Ⅱ以外	マジ・ベシ	Ⅱ以外	シ	バ・ドモ	バ・ズ	Ⅰ・Ⅲ以外	サラルス	連体修飾係結び
終止形Ⅰ	●●○●	×●●	●○●	●●●	××	×○●	×●○	●●●	●○●
終止形Ⅱ	●●●	×●●	●○●	●●○	××	×○●	×●○	●●●	●●●
連用形Ⅰ	●○●	●●○	●○●	●●●	××	×○●	×●○	●●●	●●●
連用形Ⅱ	●●○	●●●	●●●	●●●	××	×○●	×●○	●●●	●●●
已然形	●○●	●●○	●●○	●●●	××	×○●	×●○	●●●	●●●
未然形Ⅰ	●○●	●●●	●●●	●●●	××	×○●	×●○	●●●	●●●
未然形Ⅱ	●●○	●●●	●●●	●●●	××	×○●	×●○	●●●	●●●
未然形Ⅲ	●●●	●●●	●●●	●●●	××	×○●	×●○	●●●	●●●
連体形	●○●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●

資料7　三拍形容詞

分類／活用形	終止形	連体形	連用形Ⅰ
赤類	●●●	●●●●●●●●●	●●○
白類	●○●	●○●	○●○ ○●●

資料8　謡曲譜本（カヽル）

山ハ類	●○▼	36	
命類	●○●	25	
川ハ類	●○▼	40	
川ハ類	●○▽	2	
二十才類	●○●	2	

他の曲節も一貫して
●○▼　●○●

平曲譜本（折声）

山ハ類	●○▼	8	
山ハ類	●○▽	13	
命類	●●○	4	
命類	●○○	5	
川ハ類	●●▼	5	
川ハ類	●○▽	8	

白声、口説は一貫して
●○▽　●○○

但し『平曲正節』第一分冊のみの調査

補忘記（講師作法之事）

山ハ類	ナシ	
命類	●○●	12
命類	●○○	4
川ハ類	ナシ	

上巻相当部分は一貫して
●○▽　●○○